

ホオノキ ①

Magnolia obovata THUNBERG

ホオノキの概要

ホオノキは古くはホオガシワと呼ばれ、漢字では朴、厚朴、浮爛羅勒などをあてることがあり、学名は *Magnolia obovata* THUNBERG (マグノリア・オボバータ) である。英名には Japanese cucumber tree があてられる。モクレン科に属する落葉高木で、大きいものは高さ30m、直径1mくらいにもなるが、ふつう50cmくらいまでである。幹は真っすぐに伸びていることが多く、樹皮は滑らかで裂け目が少なく灰白色を呈するので、見るからに素性のよい樹という感じを与える。葉は日本産の広葉樹のうちでは一番大きい方で、長さが20cmから50cmもある倒卵形の見事なものが枝先に群がりついて拡がっている。葉の縁には鋸歯(きよし)がなく、上面は深緑色であるが下面は粉白を帯びていて、風にひるがえるとその白いのが遠くからでもよく目につく。花もすこぶる大きく、盃形をしていて直径20cmもある。5～6月頃に新しい枝の頂上に開いて芳香がある。赤味を帯びたがく片が3枚、その上に6～9枚の厚ぼったい乳白色の花弁が拡がっている。これが後には黄色がかる。花の中央には多数の雄しべが密接してらせん状に並び、その中心に多数の雌しべが楕円形の花軸の上に瓦状に接合している。果実はその雌しべ群が受精して熟した集合果であるが、全体は針葉樹の球果のような面白い形をしている。長さが10～20cm、直径4～8cmほどの楕円形でやがて紅色に染まり、10月頃開裂して緋紅色の仮種皮で被われた種子が顔を出し、それが白い糸でぶら下がるようになる。南千島から北海道、本州、四国、九州にわたって広く分布し、山間の肥沃な処に散生しているのがふつうに見られる。木材としては北海道以外ではまとまって出ることはい少ない。また現在は全国的に見ても蓄積も木材生産量も多くない。

(平井信二)